

# たまのよこやま

東京都埋蔵文化財センター報 No.21 平成3年1月15日



新年あけましておめでとうございます

私の一冊—フローの文明・ストックの文明—

常務理事 高田 健三

今回取り上げた本書は、政治学、国際関係論、東南アジア地域研究等の分野で優れた業績を残しておられる京大教授矢野暢さんの評論集です。いま変貌し続ける現代日本の本質をフローの文明とストックの文明の対比というユニークな視点からとらえ直し、日本の将来の在り方を鋭く見据えたものです。日本には今、注目すべき文明が生まれようとしており、それはフローの文明という新しい文明の形成である。民主化と非軍事化という戦後の二大選択がその基礎となっている。ストックを重視する欧米世界に比べる時、今日の日本はかなり異質な特徴をみせている。今日の日本のみせる文明的側面をフローの文明と呼んではどうかと考えている。この本は私なりの日本文明論であり、一種の国際化論である。

近年、国際収支のインバランスが引き金になって、日本と欧米の間に様々な摩擦や軋轢が生じています。これは単に経済や政治の面にとどまらず、いわゆる文化摩擦の問題にまで発展しています。「日本とは一体どういう国なのか」「日本文化とは、欧米のそれと全く異質なのではないか」云々です。その事もあって、最近、「日本文化とは」「日本人のアイデンティティーとは」が盛んに問われています。埋蔵文化財の調査も日本文化のアイデンティティーを探ることに深く関わっているとも言えます。

近年益々国際化が求められる中で本書は改めて今後の日本の在り方、進路を考える上で私共に貴重な示唆を与えてくれるものと考えます。

遺跡だより②④

—多摩ニュータウンNo.211・930・931遺跡—



今回紹介するNo.211・930・931遺跡は、町田市小山町に所在し、調査の結果、山城跡（仮称・小山城）であることが確認された遺跡です。この一部は、多摩のよこやま17号で紹介しています。前回の調査では、南・北郭と土坑・焼土跡、ピットが検出されました。今回の調査は、これらを受けて南側郭の全容と東側における城跡の範囲確認を中心に行いました。

南側郭は、二重の空堀をもつ郭で、内郭の規模は東西幅約40m・南北幅約60mを測り、前回の調査よりも多少拡がるのがわかりま

した。

また、空堀を掘った土で内郭平坦面や空堀にそった形で認められる土塁状の高まりを盛土し、有効な活動面を確保している様子がより一層はつきりしました。

堀は、内・外堀とも西側で大きく鍵状に曲がり、西南隅では内堀と外堀が一本につながり、この方面の防御に特に力を入れた様子があるかがえます。北側の外堀は、尾根を東西にほぼ一直線に走らせて郭城を画する手法を用いています。内堀は、東側の中間部まで鍵状

に曲がらせ、一層防御に努めています。南側は、西南隅で一本になった堀と南東隅でL字状に出張りになった堀の間に土橋が認められました。これは、郭内部に入る口（虎口）と思えます。

東側は、急崖・崩落地形を示しているため堀や城域の確認ができませんでした。今回の調査でも、城の年代を把握できる遺物は出土しませんでした。しかし、堀を屈曲させる形態や虎口部で喰い違いの形をとっている状況から後北条氏関連の城かと考えられます。



チンギス・ハーン陵墓

を探る 3

チンギス・ハーンは一二二七年、西夏への懲罰軍と共に遠征した際、中国・黄河支流のほとり六盤山で亡くなり、今のモンゴル人民共和国北東部のヘルレン河上流部に埋葬されたと一般的には考えられています。当時のモンゴル社会が無文字の世界であったためか、その死から埋葬に至るまでの文献記載は少なく、僅かに間接的な文献資料が残っているのみです。それは主に十三世紀には無文字の口承文芸の世界を表し、モンゴル人自らの言葉によって記録された「元朝秘史」、官撰の元代についての歴史書である「元史」、西アジアのイル汗国のラシッド・ウツデインによる「集史」の3つの文献資料です。この「元史」、「集史」には「チンギス・ハーン」諸帝を起肇谷に葬ったという記載があり、この起肇谷をヘルレン河の音訳とするものと多く

の学者は考えてきました。また、「ホルハン・ハルドゥン」という大いなる山あり……その地にチンギス・ハーン自ら、自己を葬る地を選び、「我らの親族を葬る地はここにてあれ」と言えり」という記載もあります。この神の峰という意味の「ボルハン・ハルドゥン」は「起肇谷」と同様現存しない地名ですが、チンギス・ハーンが出生から青年までの日々をおくった土地地名、言い伝えからモンゴルの学者はヘルレン河上流の山地であり、オノン、トーラの源流部である地帯が有力候補地であると睨んでいます。いっぽう、日本側の学者は起肇谷をより草原に面した地帯の可能性もあると考え、また実際に遺跡の分布も草原地帯に多く分布していることから、まずはこの分布調査からモンゴル時代の遺跡のあり方を調査し、皇帝の埋葬地を絞りこんで行こうと考えています。

（千野裕道）

文化財講座 <17>

縄文時代と人々 (5)

縄文人とゴミ  
530万t。これは東京において排出される年間ゴミ総量の数字で、このまま続くと10年後には650万tにふくれ上がることが予想されています。

これは、インスタント食品をはじめとして使い捨て商品の普及、リサイクルの出来ない新素材製品の開発等、いわば「物質豊富の時代」のつげが回ってきた現象と言えます。我々人類の祖先は、現在にいたるまで様々な形の不用品をゴミとして捨て続けてきた歴史があり、そしてそれらは使われ、捨てた時代背景を写しだす鏡と言える訳です。ゴミのこの特徴を応用しアメリカでは現代のゴミ集積場を発掘し、産業革命の果し

た役割を研究しようとさえしています。それは生産・流通・消費が強く連鎖して加速度的に発達し現在に至ったため、三者のうちどれか一つに欠陥が生じるとたちどころに無駄が出て、未使用で捨て去られる物も多量に発生する結果となるからです。

さて、縄文時代の代表的なゴミ捨て場としては、貝塚をあげることが出来ます。貝塚には貝殻の他に魚や獣の骨、土器や石器のかけら、灰などが捨てられており、その主体は食べかすで、食生活のウエイトが高かったと考えられます。また、低湿地には木の実や木器などの腐りやすいものが遺物として残っています。ここを縄文人がゴミ捨て場として利用すると、貝塚では腐ってしまふような遺物も残さされています。縄文人の生活内容さらにはこまかく知るためには、貝塚に匹敵するほど重要な遺跡であるといえます。

この両方の性格を持った遺跡としては福井県の鳥浜貝塚や、最近新聞紙上を賑わした滋賀県の琵琶湖湖底遺跡が有名です。鳥浜貝塚では糞石フコクシという糞の化石も発見されており、その内容物から当時の人々が何をどのように調理して食べていたかが分かります。

ゴミ捨て場は縄文時代においても、ある程度決められていたようで、環状にめぐる住居群の外側や使われなくなった堅穴住居の窪地などに捨てられています。現在ゴミ処理の考え方としては発生量の抑制、再資源化、減量、減溶化が考えられており、その具体的方法は建設材料化、海面処分、内陸処分三通りで、後二者については縄文時代的手法そのままの在り方と言えます。

ゴミ処理の方策は縄文的思考から一日も早く抜け出すライフスタイルの確立やそのための技術が要求されるのでしよう。(西澤明)

No.107遺跡の木器にふれて

整理作業 中村 亜理

新しい種が目を醒まし、地中深々と根をおろす。種々のミネラルを吸い上げ、太陽の光をいっぱい浴びて風や雨を感じ、或いは雪に耐えて年輪をきざみ続ける。こんな雄大かつ繊細な素材を古代の人は選んだ。加工しやすく使えば使うほどそれに答えてくれるやわらかな触感を持つ器として。放っておくと朽ちてゆくわがままな器として。

発掘された後もおそらく一番手間のかかるはかない遺物である。土から生まれ早く土に帰りがっている器。かけらでも強い力を放つ石器や土器に比べ、進行形で使われえない浮浪児の木皿は痛々しい。

こんな木器にかこまれて今まさに古代の人と同じように私達はこの素材を選びかわいがる事を思い出す。お嫁に来たとき持つて来たおせちのお重は元氣かしら……。

遺跡見学会

12月1日、町田市小山地区のNo.248遺跡において、遺跡見学会を開催しました。

当遺跡では、縄文時代の粘土採掘跡・平安時代の瓦窯跡と集落跡などが調査されています。今回は粘土採掘跡を見て頂きました。

当日は季節はずれの台風28号が過ぎ去った翌日で、汗ばむほどの秋晴れの日に恵まりました。

遺跡から出土した縄文土器や石器、そして、5,000㎡にもおよぶ粘土採掘跡を実見して頂きました。約70名の参加者がありました。



### 縄文土器作り教室

今回で第5回目を数える当教室は、10月20・21日、11月10日の3日間にわたり実施しました。

この教室は実験を通じて祖先や技術や生活を肌で実感し、遺跡や遺物への理解と関心を深めていただくことを目的としたものです。

初日は、縄文土器に関する講義から始まり、その作り方についてスライドと実演を交えて説明した後、班編成を行って製作にとりかかりました。

今回使用した粘土は、縄文時代中期の粘土採掘坑が発見されたNo.248遺跡のものを使用しました。縄文人が使った粘土で我々現代人が土器を作ることは言葉に出来ない程の不思議な感動があります。

最初は粘土が手になじまないせいか受講者各氏とも積み上げるのに苦労していたようですが、時間がたつにつれて、容易に形が出来

上がっていききました。

土器のモチーフは、図録

の写真や出土品から各自自由に選択して器面に割付し写しとってみました。当初は水分をたっぷり含んでいた黒褐色の土器も乾燥が進むにつれて口縁部の方から白色化が進み、乾燥期間中には時たま逆位に回転させたりしながら担当職員が面倒をみていたようです。

完成した土器はその後20日間の乾燥を経て火入れ作業となりました。

当日は好天に恵まれ、まず浅掘りした穴のカラだきから始まりました。一穴につき20個前後の土器を適当な間隔で並べ、本だき作業となりました。火勢がつくと、燃料の間から見えかくれする土器も真紅となり、不安と希望が交錯する時間

がもどかしい程でした。やがて受講生全員の土器は美事に焼き上がりました。

今回定員は30名のところ実には120名もの応募がありました。(山本孝司)

### 文化財講座

「木工」シリーズ最終回の講座は、11月17日に『木地屋の系譜』と題し橋本鉄男先生によって行なわれました。

古代(朽木谷)から近世(麻生山)までの文献上にみられる木地屋の説明が行なわれました。一方、唐古遺跡出土の高坏、法隆寺百万小塔、鴨遺跡出土の木盤、多賀城跡出土の円形木器など、遺物の解釈も加わり、多摩ニュータウンNo.107遺跡の木製品を理解する上で大変参考になりました。

参加者は65名で、活発な質疑応答がありました。

### 安全衛生委員会の発足

東京都埋蔵文化財センター安全衛生委員会が、平成二年十月二十日付で発足し、十月二十九日(月)、第一回の会議を開催しました。

この委員会の設置は永らく懸案となっていました。財団法人東京都教育文化財団安全衛生委員会等設置規程が本年八月一日付で一部改正され、当センター関連の規定が新設されたことにより、実現の運びとなりました。

### 第二次長期構想委員会の設置

昭和55年に財団組織として発足し、63年に教育振興財団との統合を経た当センターの事業も、数年後には多摩ニュータウン事業地域内の発掘調査の終了が見込まれています。

一方、都内各地域においては様々な開発事業に伴って埋蔵文化財を調査する必要性が増大しており、各方面から当センターに対する

期待が高まってきています。

そこで、当センターはいま大きな転換期を迎えているとの認識のもとに、東京都における埋蔵文化財保護行政に果たすセンターの役割の重要性を踏まえながら、これまでの10年間を総決算し、今後の新たな発展を目指すうえで基本方針となる長期構想を取りまとめる目的で委員会を設置しました。

### センター催物案内

センター設立10周年記念文化講演会を3月16日(土)14:00~15:30「バルテノン多摩大ホール」で予定。講師は永井路子先生で演題は「万葉女性の愛と行動―東歌の世界をみる―」。入場無料。先着140席を用意しました。ふるって御参加下さい。



発行  
財団法人東京都教育文化財団  
東京都埋蔵文化財センター  
〒206 東京都多摩市落合  
1-14-2  
☎0423-74-8044  
平成3年1月15日